

東西文明・文化の caos から モダン都市大阪の結晶が...

博覧会を先鋒に社会を席捲した近代技術の数々は、都市と暮らしの様相を一変させていきました。注目すべきは、それらの技術が大阪に蓄積されてきた歴史・文化・風土と融合し、創造の母胎となるカオスを呼び覚ました事実です。近世と近代、西洋と東洋、文と理、異なる思想や技術が入り混じり、結晶としてのモダンズム文化が生み出されていったのです。

1912年

★Yosano Akiko
★Kanao Tanejiro

大阪で培われた文化の再発見だ!

金尾次郎(33歳)、本づくりの粋を凝らす!

東京に拠点を移した金尾文淵堂は、一流の画家たちによる凝った装丁の美しい本づくりで知られた。『畿内見物』はその代表作で執筆するには、東京在住の与謝野晶子のほか、高安月郎、薄田泣菫、吉井勇などが名を連ねた。

1913年 足穂少年(12歳)、
全国発明品博覧会場で、
飛行機の実物に心奪われる

内閣博跡地に誕生した天王寺公園に、稲垣足穂は大阪・船場から明石に転居したのちも度々訪れた。天王寺公園で開催された博覧会で目にする実物の飛行機に少年は眼を見張った。メカニック、オブジェ、天体に心奪われた少年は、長じてスペクトラムのごとき著作の宇宙の扉を開く。

ボクはきこっと、飛行機乗りになりましょう!

★Inagaki Taruko

モダンの極み“大大阪”から 歴史・文化・風土の再評価へ...

権威によらず、さまざまな分野の職業一人ひとりが垣根なく結びつき、刺激し合い、モダン都市大阪の粋が極められていきました。大正末期から昭和初期にかけて“大大阪”と呼ばれた時代は、その頂点ともいえるでしょう。同時に、彼らは、失われつつある大阪の歴史・文化・風土を再評価し、後世に伝えていることを使命とする、研究・出版の大きなムーブメントを起こすのです。

1923年

直木三十三(32歳当時の名)、大阪で日本一モダンな雑誌の編集に携わる

この雑誌で、日本の出版を変えてやる!

★Naoki Sanjugo

直木三十三(32歳当時の名)、大阪で日本一モダンな雑誌の編集に携わる

1912年

荒木和一(40歳)、新世界の開発に尽力する!

★Araki Waichi

通天閣の凱旋門・エッフェル塔!

稲垣足穂「ノアン」氏の月世界

内閣博跡の荒木和一是、新世界・ルナパークの企画と運営に参画のちに大阪商工会議所の委員にもなり、大阪の財界で重きをなした。

1909年頃

大阪市は一つの有機体

木下幸太郎 大阪

大阪の名所、文化、風物詩などを画家の中沢弘光が取材し描いた挿画を木板ほかの多彩な印刷術を駆使して組み込み造本している(上の木板画は四天王寺、下は染物の干し場が並ぶ河岸風景)。

“超時空遺産”上町台地 博覧会時代 モダン大阪に煌めいた若き才能たちの光跡

関連人物エピソード年表

- 1909(明治42年)**
 - ★内閣博会場跡地の東半分にて天王寺公園が開園。本格的な都市公園としては市内唯一のもので、その後も大小の博覧会会場として使われた。
 - ★天王寺公園を描いた絵は(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)
- 1912(明治45・大正元年)**
 - ★与謝野晶子(33)、金尾次郎(33)の依頼を受け、翌年11月に『新訳訳語語』4巻を金尾文淵堂から出版。
 - ★内閣博会場跡地の西半分にて新世界が誕生し、遊戯施設が並ぶルナパークが開園(1923年開園)。
 - ★荒木和一(40)は、跡地の開発会社顧問として新世界の開発・運営に参画。
 - ★金尾次郎(33)、『畿内見物 大阪之巻』を發行。同書は、多分野の才能を集め編集・印刷技術の粋を尽くした金尾文淵堂の本づくりの代表作。
- 1913(大正2年)**
 - ★足穂少年(12)、天王寺公園の全国発明品博覧会で、伏見・深草で墜死した武石浩波の飛行機と壊れた飛行機の破片を目にする。同時に、1910年12月に代々木練兵場で日本初飛行を見せた日野熊蔵大尉のグラデー式単葉飛行機の実物展示にも目を奪われる。
- 1916(大正5年)**
 - ★稲垣足穂(15)、飛行家を目指し発足したばかりの羽田の「日本飛行機学校」の第一期生に応募(近視のため不合格)。
- 1919(大正8年)**
 - ★金尾次郎、『畿内見物』全3巻をまとめ増補した形で『畿内行脚』を發行。同書には、当時の文化を牽引する作家や研究者が参加し、大阪の浄瑠璃研究家の木谷達時(42)も執筆。
- 1923(大正12年)**
 - ★稲垣足穂(22)、『一千一秒物語』を刊行、モダン文学の新星として注目を集める。
 - ★関東大震災(9月1日)の後、金尾次郎(44)は金尾文淵堂の拠点を再び大阪に移す。
 - ★関東大震災のち、東京から大阪に戻った直木三十三(32)はプラトン社(生家に近い谷町5丁目乙20番地)に入社。大正一・昭和初の編集・デザイン史を彩った雑誌『苦楽』編集に携わる。以後、次第に直木は時代小説の執筆にも取り組む。
- 1925(大正14年)**
 - ★4月 第二次大阪地域拡張。周辺地域を編入し、人口・面積ともに日本一の都市「大大阪」が誕生。
 - ★「大大阪」誕生に合わせ、毎日新聞社主催の大大阪記念博覧会が天王寺公園と大阪城を会場に開催される(3月15日から47日間)。
 - 同博に向けて、赤松麟作(47)は大阪築城・落城を壁面に描く。本館では、大パノラマを囲む27テーマで都市・大阪の現状や未来像を示す展示が並んだ(「文芸の大阪」展示を木谷達時(48)、「名物名所の大阪」展示を上方文化研究家の南木芳太郎(43)が担当)。
 - ★直木三十三(34)、映画製作者集団「連合映画芸術家協会」を結成し、映画制作に取り組む。
- 1926(大正15年)**
 - ★赤松麟作(48)、心齋橋筋の丹平ハウスに赤松洋画研究所を開き、後進の育成に努める(門下生には佐伯祐三)。
- 1929(昭和4年)**
 - ★木谷達時、雑誌「郷土趣味大阪人」発刊(10号で終刊)。
- 1931(昭和6年)**
 - ★南木芳太郎、上方郷土研究会を発足し、機関誌「上方」を創刊(1944年の151号まで刊行)。
- 1936(昭和11年)**
 - ★住友家から寄贈された日本邸跡地に市立美術館が開館。
- 1945(昭和20年)**
 - ★大阪大空襲で、大阪市街は焼野原に。
- 1946(昭和21年)**
 - ★大阪市立美術館付設の美術研究所が開設され、赤松麟作(68)が美術指導担当教授に就任(備井克之、須田国太郎、小磯良平、田村孝之介らも共に美術指導を担当)。
- 1947(昭和22年)**
 - ★赤松麟作(69)、金尾文淵堂から、戦災前の大阪を描いた『大阪三十六景』を出版。

近代化を目的に数々の博覧会が開催された時代(大正)には、常設の科学館も誕生しました。昭和二(1927)年に大阪市電氣局が四ツ橋に開設した電氣科学館は、科学館としては日本初電氣の普及にとどまらず、科学をテーマにした社会教育施設としても構想され、その扉は未来志向が特徴です。特に人気を博したのは大階段に設けられた東洋初のフナタリウム電氣局幹部が欧州で実物を見て大に感銘を受け、建物の建設中に設計変更して、当時最先端のドイツ製機械を導入したもので、少年時代同館を訪れた手塚治虫も初めて目にする鉄アレイ型の機械に強烈な印象を受けたと語っています。また、織田作之助も星の劇場という作品で戦地の夜空に故郷を思ったという友の便りに促され電氣科学館に赴き、そこで見た人工の宇宙に魅了された感動の場面を記しています。子どもも大人も、すべての世代の心を捉えたのは無限の宇宙と未来への夢だったのでしょうか。

1925年

南木幸太郎「物産」の大阪

誇るべき史跡が失われている。薄は、水の都が黒い煙の都と化した。ある今日でも名所といへば少しは風情もあり、由緒も長い箇所を名所とし、数上げて見ました。幸ならずしる所、浪花に誇るべき史蹟は悲しい。なんなんだんごてい、一寸見がかんか。

★Akamatsu Rinsaku

★Nanki Yoshitaro

1925年

夫れつある大阪の文化を、目を向けよ!

★Kitani Hougin

「上方」第100号掲載の写真。内閣博前年の明治35年1月、関西文学同好新年会に集った面々で、前列左端が金尾次郎、右隣が南木芳太郎、3列目右端は与謝野鉄幹。

戦後に上町台地で開かれた復興博覧会(1948年、毎日新聞主催)に、奇しくも南木芳太郎の息子、南木淑郎が事務局として関わっている。

「むすめ」

プラトン社の雑誌「女性」

阪大大阪博覧会

大阪記念博覧会のポスター

雑誌「郷土趣味大阪人」

雑誌「上方」

郷土研究「上方」